淨土宗因向文和訓圖會

上

バ5
1811
3-1

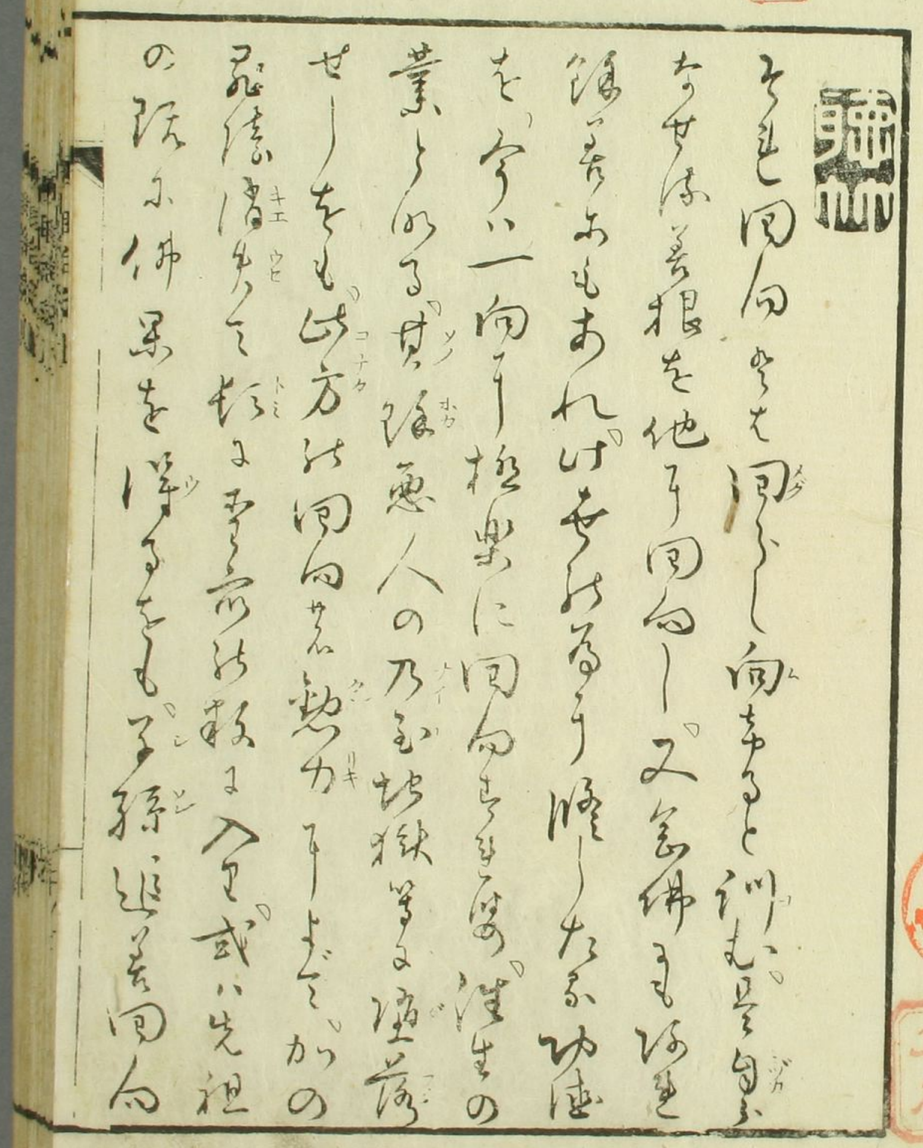
特
ち波ハ
1811
1-3

真阿上人序文
松川半山畫圖

淨土宗面向文和讃圖會

田中宋栄堂發兌

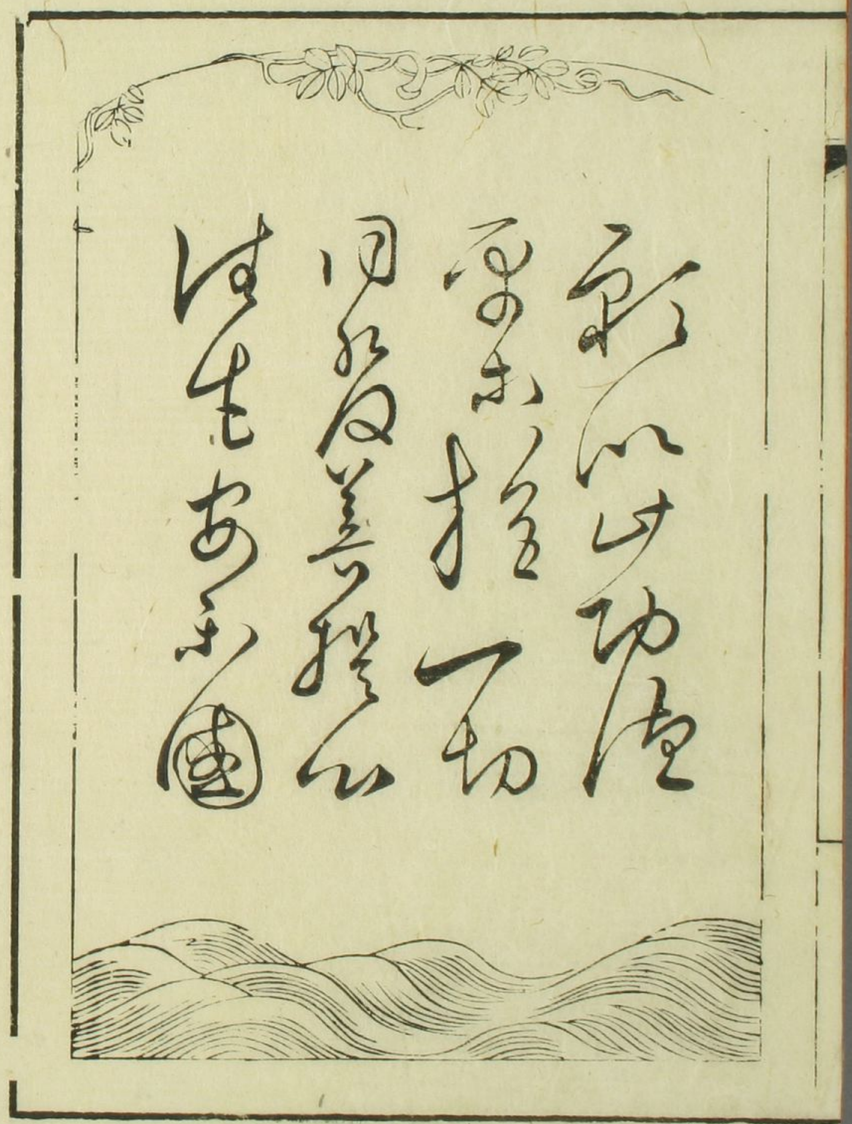
本宗

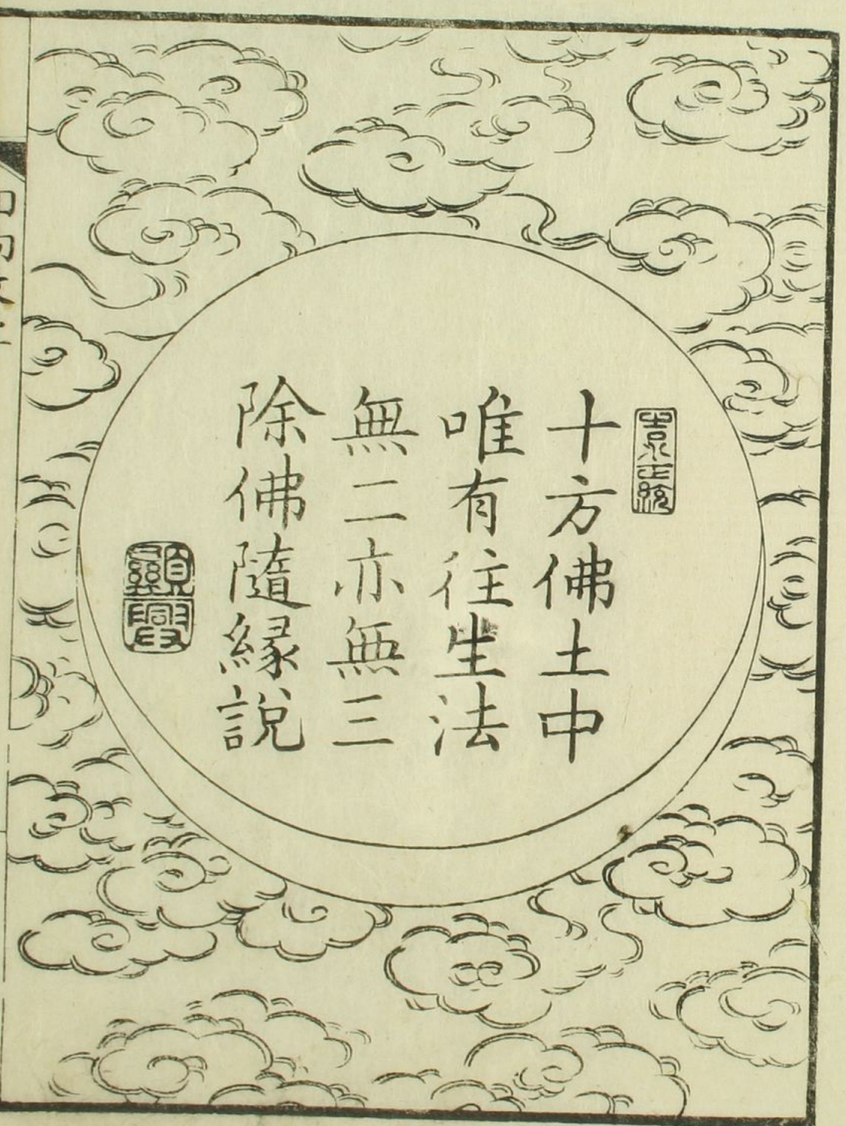


大谷文庫

こゝて往上人の位階をすゝむれども、爲ちゝ
貴く成ることかたきるを元は同宗を紹て八
德の二種の勧列又淳善の重書直出等
時ゝ義論の業ともいまく其要を言ハ
徳を若去三途勤苦の處乃ち出家解
脫を得き天台師ハ其ゝ法華經の
うち其義を示しの〳〵まつゝ野辺の土
一番を述新して同宗又和解よい人よい
ゝゝ在家者修をしゝる其法要を燒ま

知しむ予故ゝ一閲して隨義の經ゝ
粗同宗の法義を事ゝ略ゝ
を修繕しぬ。
弘化ゝ年辛酉孝蓮門主河野興証




十方佛土中
唯有往生法
無二亦無三
除佛隨緣說

京都
知恩院
御忌詣
之図

下乗

浄土宗田向文和訓圖會巻之上

浪華　好花堂野亭著

圓光大師之略傳　延生瑞現之事

それ我本師大慈教主釈迦牟尼如来流浪三界の迷る徒を救ひ助けむくるの平等一子の悲願を発一すへ無勝荘厳の化を隠さ娑婆濁世ニ生を現一むひ御在世八十年の慈雲ハ〳〵群生を覆ひ滅後二千余回の法水普く大千世界ニ流れ教門品異ニ利益區〻ゑの就中聖道の二門ハ穢土ニて自力と厲一濁世ニ在て得道を期ス難ども時流季ニおよんで煩悩具足の凡夫容易修一がゝ庸愚下根の輩輪廻を離を成佛得脱を爲ハ只是浄土宗の

一門なり。唐朝の善導大師弥陀の化身にして本願の深意を顕し
給ひ吾朝の法然上人勢至の應現として称名の要路を開き給へり和漢
國異なれども古今時同じくして流れも其旨一致なりて末世下根の衆生信心と
得安く念佛の弘通最世に隆かり。極樂往生を庶幾徒誰か二師
の法恩を仰ぎ尊まざる。抑法然上人の御系圖を尋ぬるに
御父八美作國稲岡庄の住人久米押領使漆間時國と申す御母八秦
氏なり。此時國の先祖は十八代の皇五十四代仁明天皇の裔孫西三条右大
臣の末流式部太郎源利邦犯せる罪有て美作國へ迯さる是に依て
利邦當國久米押領使神戸大夫漆間元國が女を娶て男子を生と
元國世嗣の男子無りければ孫と仰て家を嗣せり。此時源の姓を改て

漆間時行と号す。時行が子重俊くだり子國弘ぐだり子則ち時國なり。此
時國初老を過ぎども一子なきを愁ひ夫婦共に合て勢至菩薩
を念じ奉り一子を授給へと祈求る事切なりければ佛天も其誠心を
感じ給ひ一夜の夢に妻秦氏剃刀を呑と見て妊娠せり。時國が怡び
斜なず。或易者に妻の胎内の子の男女を占はしめ給ふに易者是を占
ひて内君の孕給ふ所八男子にして智は顔回に天下隨一の知識となり
給へしと申ければ時國怡び其言を信じて妻に其由を言ふ。酒肉
五辛を禁じ給ふ。夫婦とも深く三宝を信仰し給ひ。降誕の日を待給ふに遂に
崇德院の御宇長承二年四月七日午の刻妻秦氏少も悩む事なく
平産に玉のごとく男子を産給ふ。時に邸舎の屋上に霊雲たなびき家の西

小本二股ホて梢繁茂る椋有るぶ何國よりとも来ず白幡二流れ
紀表て其梢ホ〻を。妙なる鈴の音〻〻と四辺ホひゞき。幡の色日ホ
映〻ていと鮮なりそれむ。時國を先〻て〻る者奇異のおりしとき
ざるハ〻し。幡八七日と過て天ホぞ昇去る。是より其椋を二幡の椋と
号ぶ。後年星霜重りく傾き倒れども。常ホ霊香薫ぶる。
諸人崇んぐ其跡ホ佛堂を建る。美作の縁生寺是なり。且説時
國夫婦ハ出生せ〻子を愛育勢至菩薩ホ祈誓〻て儲る子ホれ
ども勢至丸と呼く掌の玉のごく慈愛る。いまゞ竹馬ホ鞭ろ頃よ
り器用発明諸童子ホ勝る。假初の遊戯ホも佛躰を造り堂塔を
建る真似を〻。又平日家の西の壁ホ向て坐る。傍ありて。頗る天台大

師の稚子ホ似たり〻〻。歩ホ勢至丸ぐ九才の時不慮の災変ぞ起りる
其故を尋るホ當國稲岡の守護人ホ明石源内武者定明（伯耆守源長明が嫡子ホて堀川院御在位の時の滝口と云者ホ）自分の権勢ホおゝせ國人を慢り狂ふ。
の時國ハ前ホ述るごく先祖の系圖正死を〻〻敢く定明ぐ下知ホ従ぞ
却て内〻定明ぐ系圖我ホ劣ると嫉妬〻〻れむ定明世ぞて深く遺
恨ホさ〻たき。保延七年の春二月上旬俄ホ家士縁体を駆集て不意
ホ時國ぐ郎舎へ夜討ホど押寄る。時國思もよらぬなれど大ホ驚て
在合家士ホ下知て防矢を射させ〻れも。矢種も多〻ず。敵ハ多勢ぞ上
皆甲冑ホ身と固め矢種も十分用意〻〻れむ。防禦叶ぐ〻家士尽く手
を負。或ハ討死ぐ〻ホより。時國矢種ハ尽つ今ハ是まてぞとて引投捨太刀と

拔ぎ捨て敵小こうろう合憤逆戦
して敵三人斬く廿〜七八人小手と
負せられども其身も金石あらがれも
薄手重手多く負ろう。此時彼時
國が一子勢至丸ハようゆ〜九才ム成る
が母と先ら〜乳人侍女们を怕まどひて
逃去られども勢至丸を心臆せず屋風
の陰小隠ろうらび居ら小敵將定
明庭上小馬を立下知をたくく在
れば勢至丸見すま〜小弓小矢と

たづく強言て兵ど放小過さぎと定
明が眼下小発止と立定明大小怒る
馬より噇ど落るふど定明が郎
黨仰天し急小扶起し肩小ひて
主の館へと逃ろ是ら且ら凡て殘
る家士も皆引退る軍頭小止小
られば時國が妻ともに乳人侍女
们追ふろ時國が數ヶ所の
金瘡を見く皆入大小怒る
みよ湯よとくく入て衣抱する小

時國苦痛の眼を開く我子を近く招き我不運にして斯妻の手に負れて迚も存命叶ふまじ仏ぶつ九分の小脇ふく定明小矢射付し父の仇を復せよ高名なり我年来身の由緒正邪を自負し當庄の司る定明が下知を用ひず彼を旺し怠慢誘せしめ遺恨止堪ず夜討をうけしある爾し是我が招邪し過ひ定明を振殺邪おのおの何度も前世の業因なれば身と悔より為方なし汝も定明を父の仇と狙ひ仇ぞ胎内に在し内に易者の占ひし紀も天下随一の知識となる爾子なりと謂ふ父が最期を出離の縁とし在俗を捨家を出て得道し父が菩提を弔ひ一族縁体の者も佛果を得さしめよと悔に遺言し西向て合掌し弥陀の宝号数十遍称へて遂に眠るが如く命終しぬる妻子の悲歎いと更なり家族より集て法悲めども其甲斐なく小さき棺に収め葬礼の式を整て同國の菩提寺とする山寺へ送り葬る勢至丸も葬列に従ひ送りて諸人皆其幼少にして父の敵に矢疵を負せし健氣さに賞誉し小前児とぞ呼名しる是偖も菩提寺の院主を観学得業とし元を比叡山延暦寺の衆徒なりしが大業の望を遂ずして南都興福寺へ博住して法相三論の深理を学び極め故有て當國善提寺の住侶となれり其此得業八漆間時國が妻紫氏の弟なりしむ勢至丸の母に親兄叔父なり依て紫氏亡夫の遺言に任し勢至丸を出家得道の支を得業に頼る小得業承引し此児の人相凡骨を離れ生立又普通の小児と異なく三宝を敬ひ勇も膽略をそなへ夜討の騒動に

も臆せざる父が當の敵を射さうしハ丈夫も及びがたし何さま出家得道せば
天晴當世の名僧となるべしとて其伯父寺に留めおかれぬ母ハ安堵の思
なりして我邸へとゝ引とる其ハ后得業ハ勢至丸が手跡素讀をさせるに
勢至丸天性智慧明敏上好むところなれば寢食を忘れて疑學るゆゑに
手跡ハ筆法師の坊にも勝れ素讀ハ記憶たゝ四書五經を先にして讀
みしの書物を尽く暗記し師の講釈を待ずして其文意を解るに
ど得業大に驚歎し此小児果して凡人にあらず必ず佛菩薩の化身なる
べし宜しく延生の砌種々の瑞現有り吏よりて其より經論と讀習し
むるに小部の經文を一度讀で暗記して能誦し大部の經文とゝ雖も三遍に至
て讀で悉く暗記せざるとなし得業益々感じ此者我に如

き凡夫の徒弟と為べ給ふる奇童を兩鄙の壁に埋
しめんを最惜べし不如都鄙山へ登り彼山に修學させば一山
の学頭とも成天下に名を專子程の名僧と成らんと勢至丸も其
旨を語られ給れば児大に怡び是素り望むところなれば願くハ一日も
とも疾く都へ上らしめ給へと乞ふに得業も悅び慈心に仏が如に此事を
告納得の上に上京すべしと児を伴ひ里の母恭氏の邸舍へ
いとう對面して修學のあい勢至丸を京師睿山へ登せんとて告
られ給ふ母ハ一度を喜び一度ハ愁ひつゝ幼稚の一人子を遠く都へ上
さんとを名残を惜く思ふ否にも得中ぬ涙さゝぐて有無の答を
なしかねられる得業姉の心中を察し練てやられるもいとも受がたく身

受遇ぐられ佛の教に遇ハ願ても得ぐられ福なり。ゞ佛道を修行すると
も此偏國に生ハ発達しがたし。睿山に博識の名僧多れバ学業成就し安
く運に叶ひて一天の君乃祈の師ともなるべく父祖の名を輝し九族佛果を得るに
いとゞ。眼前の無常と人々夢裡の愛著と捨難きなりと諭されぬ
れど兒も幼を幾ばくの父君不慮の兵難にて世を去り際に臨ひ
御遺言稚な耳の底に遺り片時も忘るゝ事ハなくいまされど師の御坊の仰
せに任せ都へ上り佛道修行し先考の佛果を祈りまゐらん御恩の高く深
く東海山にも比ぐられ母公なれど現世に在さん程ハ御側に居て朝夕に孝行と
思ひまゐらせんとぞ。御佛の金言に有為を厭ひ無為に入る父母真実
の報恩なりと宣ひしと宣ひぬ。一旦の別を惜み永れ歎を遺しまゐるべ

と。大人の練るに母公其賢なる道理に感じて此上ハ其身の望に任せ
ゞとよ承引れなれど袖に余る涙ハ二流の滝となり我兒の髪を撫て
かくまでもかなれ親のこゝめてしこの別をきくにつけ
ごと口号れる実や子を思ひ親心有為の惑ひ迷ひ恩愛の別れ腸
を断ぬ。一首の哥に推量られ得業も不覚の涙に袖を濡されぬ
が心弱くて八叶ハゞと遂に別を告勢至丸を將ゝ菩提寺へ立入り兒が旅立の
准備と何是と調へ西人の弟子僧に睿山西塔の持宝坊への傳書を持せて
勢至丸を啓行せまゐらせる。是近衛院の人安元年二月十三日のことなり

勢至丸上京於叡山修学之事

勢至丸ハ二人の僧に伴れ美作國を立て千重の霞をまゐけるべく九重の

雲ふ入名ふ八くすー比睿の山茂きて行路次ふて當時の摂政法性寺左大臣忠道公の通行ふ行合々。是ふよつて勢至丸を二人の僧と共ふ路の傍ふひゑくく行列を拜見せゝれ多ふ忠道公車の物見より勢至丸と見るひ仕丁ふ命て車を留めさせ近臣と以て其児八何國の維ゞ子そと尋問まれ付添ー僧如斯くくとゞ答る。近臣其由を主君へ言上ー多ふ忠道公ゆるひ車の内ふて式礼ありて車を曳ー過られる。従者の面〻不審ふ思ひ帰館の後此事を問まゝせる。忠道公仰多ハ今日路次ふて見ー児八凡人ふあゝず眼光暉て人を射予も目映るゝー後年必ず天下ふ名を揚るわどの名僧となる者ーと奇ひ式礼せりしを語ひるゝれど月輪殿下も此事を傳ゆるひ僧を源空上人を深く御帰依有多ふ

昔弘法大師いまゞ幼少の砌都より巡察使贄州へ下向ありて屋鳳の浦を通行あり多。衆民ふ雑ー見物せゝれ多ふ彼巡察使小児大師を見ゝ馬より下式礼ありて二十歩ばかり行過又馬ふ乗らゝせられ多ふ隨遂の者不審ふ思ひ其故を問れば巡察使答て汝ふ眼ふハ凡人ゝず今彼所ふて凡ー小児八凡人ふゝず四天王彼小児を守護ーあふ是佛菩薩の

化身なる者〜。依て馬を下て礼をなせりと語まことや。忠道公の勢至丸ハ
式礼あつ〜申日の談ハ。梅檀ハ二葉よりも芳し。古今ともハ名僧の
生ゝを知人を知る。去程ハ二人の僧勢至丸を伴ひ。睿岳ハ登り西塔
北谷なる持宮坊へ参行門呼て。観学得業の傳書と早〜ゝれば。住侶
源光書信を開封して續ゝハ始ハ寒暖の音信を述ハ進上大聖
文殊の像一躰とむ。ゝを書たり。依て使僧ハ文殊の像を持奉右〜やと
問ゝを。ハ左ゝの品ハ持奉しハ。此児を送届よ〜の師命ハてゆ〜答
ゝるハよ。源光早く得業の意中を悟ゝ。偖ハ彼児の才智世勝ゝ
喩給なる者〜とて勢至丸を受とり両僧ハ返翰を書てあ〜られ。ハ二人
を辞を告て自國へ〜ゝ帰り。斯て源光ハ勢至丸を坊ハ留置天台沉の経

論を續学ハむるハ前ハ述〜〜紀臆万人ハ勝ゝ部八二度續〜
暗紀〜。大部ハ三度ハて紀臆無も其理ハ通〜ゝるハ。源光驚歎〜
実ハ得業ハ文殊と称〜て送越ゝるも冥ゝるハて甚ハ愛
〜愈修学を凝〜四教義を授ゝるハ凡ゝを受職をさ〜て不審と
ゝるハ其問〜ゝ皆天台沉の大事とゝす論義のゝ〜ゝれ。源光ハ益〜
感〜。実ハ是神童なり。我等〜〜紀者の及ゝ所ハ。一山の博識〜ゝ
人の徒弟となり。天台の深理を究〜む者〜とて。久安三年四月八日勢至丸も
意中と言ゝ〜。日山功徳院の肥後阿闍梨皇圓の許へ伴ひ行。対面〜
て勢至丸ハ凡智ゝ〜ゝる由を語て見せ。万望徒弟となり〜ゝひく教諭を
加ゝへとゝ。皇圓ハ皇圓阿闍梨手を拍て中ゝれ。奇ゝるハ去ぬる者

林々ふ満月我菴に入と見さめるふ果て此奇童を得ると糾ふ〻ず怡び道
ふ師弟の約をせられるふぞ源光も怡び拜謝して我坊へ入られる抑皇国
阿闍梨と申ハ栗田の関白より四代の孫三河権頭重兼の男揖生の皇兒
法橋の高弟ふく當時一山ふ秀る博識なり勢至丸を徒弟とな〻て
より其技撰を試〻るるふ一を聞て十を知奇才なれむ深く怡び天台
の秘訣とする所の經典を学しむるふ勢至丸怡び〻修学の窓ふ螢雪を
集め切磋琢磨の功を積る程ふ学業の進て恰も朝日の昇るごく
なれむ師の坊皇円深く讃美られ十年十二月勢至丸ガ翠の髪を剃拂
ひく沙弥とせられ戒壇院ふ於て大乗戒を授けられる是より沙弥倍
經論ふ晝夜眼を肆し九夏三伏の暑ふも手ふ經巻を放ず玄々素

雪の寒ふも口ふ經論を誦して止ず勤学ふ身神を凝せ更三年生年十六
歳ふして天台の三大部を見究四教五時の廢立明ふ三観一心の妙理尽さ
ざる所なく立る所の論義殆ど師匠の教ふも踰る皇円阿闍梨
も恵と捲て驚ち感じられ此者こそ大業を遂て天台宗の棟梁となる
べ〻と未頼〻く思れるふ勢至丸沙弥ハ更ふ天台座主の高官を望ず
心中ふ此年頃修行せ〻所の学業ハ悉く名利の学ふして更ふ出離の
要道ふあらずと厭捨遂ふ皇円阿闍梨ふ辞を乞て功德院を立出久
安三年秋九月十三日生年十八歳ふして西塔黒谷の慈眼坊叡空の菴へ
いたり叡空ふ對面して小僧幼稚の砌父の遺訓を受て以来佛道ふ
入る之彼の師ふ就て祖經論を学とゝべる皆名聞栄利の学ふて小僧ら

望ところふあるべし只出離の道を得て隱遁して世と閑寂に送りて亡父の
善提を弔ひたく願くは尊師憐を垂れ我風願を果さしめ給へとやき
きて虔空深く感じ呼吾子いまだ若年にして遁世の望を起すと雖是
法然道理に合し聖なりと賞して即ち法然房と号弟子となして菴に留
め置きて法然房昼夜慈眼房に恩を謝す是より慈眼房に脚を留め実名を先
師源光の源の字と今の師虔空の空の字とをとりて源空とぞ名乗られさ
きて後に世人法然上人とも又源空上人とも称しまりて慈眼房虔空
と中大原の良忠上人より口頭戒を相承せり今て瑜伽秘密の法を究し山の
尊敬深く世人仰ぎ重んじる大徳なり去程に源空師は黒谷を移住有て
より偏に名利の学を捨一向に後世佛果の道を求られ何の道に依てり生死

流轉の此岸を離不生不滅の彼岸へ到る為と一切經を先と代々の知識乃著
し置きし自宗他宗の書籍目に觸ざる所なく事に出離の道を求
られ又一時源空師師の坊虔空と口頭一実の戒躰を談論せられるに
虔空師心をくして戒躰とすとやされ源空師は性無作の假色とくく戒
躰とすとやされ互に問答時を移されど虔空腹を立て百合木抜を
くく源空師の面を撃ちるるに源空師再び言と出さず座を起て退
られり其より虔空師は独沈吟して口頭の戒躰を種々に工夫せれども
果して源空師の発明せられし所至極の深理にて天台大師の本意に合べき
妙所なる事を覚り大に後悔して自身源空師の坊へいり頭を低て老僧
愚昧にして前刺は不見の我意を言募猥に御坊を去撫せしこそ無礼く

よく〳〵思惟するに御坊のやまれし所こそ四頭戒脉の極意なれ此上は我
廉忽の罪を恕し。自今以後は我御坊を師と〳〵不審の義は尋問ゞ〳〵
とゞ絶られざる。斯て年序移り保元々年源空師二十五才のとき。睿空上
人に辞を乞嵯峨の清涼寺に詣一七日参籠ありて。我求る所の法を得さ
しめよと。丹誠を凝し祈られる。當寺の本尊は天竺毘首羯摩の作にて
生身の釈迦如来を摸刻せし霊佛なり。始震旦へ渡し給ふ。又吾朝へ渡しゝ
依て當寺の本尊とすられしなれば霊験あらたなる。源空師も殊更
に信仰ありて祈願を篭られ。偖一七日の参籠畢て後南都へ
藏俊僧都に謁して法相宗の奥旨を問究其后また都へ帰り御室に
大納言法橋慶雅に對面ありて華厳宗の秘訣を問究其外諸宗の碩徳に

ゝ〳〵として其宗〳〵の奥義を尋極られしも未意に適し義もなく又一切経
を繰返し見る事前後都て五度に及ぶ。斯釈尊御一代の教跡に就て
思惟工夫あれども彼も是もむつかしく更に思慮に落る法も無り多に不計恵
心僧都の往生要集を見るに唐の善導和尚の釈義によりて法を立称
名の行に依て末世下根の凡夫も順次に浄土に往生する旨〳〵述るに眼を
留られ。乃是まで是等の書も閲せしかはゝ〳〵なれども心も留らざる
名に念佛弘通の時節到来せしや第八度目に及て一心専念弥陀名号
行住坐卧不向時節。久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故の
文に眼とまり是こそ末世の凡夫弥陀の名号を称ふに彼佛の誓願に集
して慥に浄土へ往生を遂ふ理を始て発明せし心の雲霧霧

歓喜踊躍する吏斜ならざるに、是より餘行を捨て専修念佛に心を凝し、
始て念佛門を開き有縁の衆生も教勧られける是六條院の承安年
の春にて生年四十三歳の御年なり。諸人念佛門に帰依する者雲霞のごとし。後
弟子衆も日々に数増世挙て源空上人と称し其法徳を賛美せざるなし。
是まで〻弥陀の一教吾朝に縁深く念佛の勝行澆季の人乃機
に相應せり故なるべし。斯て源空上人は睿山を出て西山の廣谷という所
に庵を結び住しまいるが此所も意に適はぬ所ありとて東山に水に閑寂なる
地あるを尋ね廣谷の庵を移して住すべし。この黒谷是なり。源空上人を
善導和尚の教に順ひ惠心僧都の示に任せ称名念佛の勤日に八万遍
なり。後年に成ては一日一夜に七万遍の念佛をなせり。一時

源空上人不思議の夢を見たまひる所は東山真葛が原と覚しき一座の大山
あり其嶺極て高く南北遠くして西方に向ひ山の麓に大河ありて碧水北よ
り出て南に流れ川原漠々として廣く遠近の林木緑深く源空上人試に
山の平腹に登り遥に西方を臨まるに一朶の紫雲天に聳びきらんとす其
其雲漸々に近く来りて上人の前なる空にて消滅ぬと思ひて雲中より
一人の僧出現して上人に向ひ其姿腰より下は金色にて目も映く腰より
上は墨染なり。上人林心に奇異の思をなし合掌して拜し御僧は何人
にて在ますやと問ふに彼僧答て我は是唐の善道なり。御坊衆生のために
専修念佛を弘めらるる吏の尊きを来り見るなりとて即ち傳法要偈と
相傳有れば源空上人受持して大に歓びまいらせと夢さめて覚ぬ。上人

歓喜堪むなし。我念佛弘通すると善導大師も歓ひ給へるを。斯夢が
来現しなり。至要の偈を授りて。亜五が命ぜを夢が見るし。善導大
師の面貌姿を指揮して写させ給ふ。世が梦の善導大師と称するを是
なるべきなれ。源空上人善導大師より直受の相傳が依て。宗門の名を浄土宗と
号のるし。愈世が口称念佛を勧めが宗門が帰依する貴賤僧俗水の低れが
就ぐるし。幾千万とも数をきらぐ其員。朝が元法徳四海が普くるし去程
が源空上人浄土門を開めが就て唐宋二代の高僧傳の中より雲鸞道綽
善導。懐感少康五人の師を抽で。浄土宗の相承と玉ひるるし。其後上人
の弟子俊乗坊重源が入唐せんとする前が源空上人重源が対面しなが
和僧唐土へ渡られが。彼赤雲鸞道綽善導懐感少康五師

の影像ある事。何年其を尋求て帰朝。源空小賜と御頼あるに重
源領掌。唐土へ渡りて普く諸國の霊場を廻り。右五師の画像を尋
求るに。果して右の五師を一幅に描き影像を得る。重源大に悦び源
空上人の共見の違ざると感歎。我師凡夫にして世人勢至菩薩の化
身なりと云傳も宜なるかと深く信仰。帰朝の後右の画軸を上人に進
ぜられ。斜ならず悦ひつゝ見るに先年夢に見し善導大師の面
貌と画像の善導大師の面と相似るにぞ。弥不思議の思をなす。二尊
重宝となるべし。右唐画の五師の像は上人往生の後嵯峨の二尊院に納
まる。今猶彼寺の什物となれり。昔大炊帝の天平宝字七年に當麻の中将
尼の祈願に依て。弥陀如来老たる尼と化し給ひ観音織女と化し給ひ藕

絲を繰て織女ましく曼荼羅を序正方の縁の竟観三障の雲の光景
を顕し給ひ紙見る人きもに何の体相とも弁知事なるに其代り九十六
年を経て文徳天皇の天安二年に唐土より善道大師の註釈あり。観経
の疏と云書物吾朝へ渡り始て當麻の曼荼羅の極楽の体相を織顕し
給ひ事を緒人知る。其後源空上人も始て浄土門を開き給ひ御自分の織
見を以て曼荼羅大師の五師を立て宗門と相承となし給ひ其より遥
昔唐土に八已に五師の影像と一幅の画軸に写し置給ひ彼當麻の曼荼羅
と同日の論に成。源空上人暗に是を知給ひ重源に命じ吾朝へ取寄の給ひ
不思議と事の余あり。浄土宗に入念佛の行を改修する輩唐土より
五師の真影を拝て少し上人の凡人に在ぬ事を仰ぎ尊ぶ倍称名乃

動を疑ひ宗門に入り日夜絶間なく

撰擇集御述作并大原問答之事

源空上人の法義年と追て繁昌し信心の徒は臨終に聖衆の来迎に預り種々の奇特を現し多くは六天の君を首とし親王宮方女御更衣公卿

小八九條関白兼実公殿 月輪 大炊御門左大臣殿花山院右大臣殿 京権大夫隆信朝臣民部卿藤光野々宮左大臣以下の月卿雲客源空上人を帰依し給ふ

後弟と成る。もあり。諸宗の僧侶も自宗を捨て念佛門に入り武士は熊谷次郎直実津戸三郎為守 其糟太郎忠綱宇津宮弥三郎頼綱園田太郎成家千葉六郎 渋谷十郎頭宮兵衛尉 と其頃武勇の士と有輩も弓馬を捨て皆上人の徒弟となりぬ 増て市人農民は枚挙する暇

あらず。減小浄土宗の般若昌此時なりとぞ人々云ふ。然は建久九年正月元日より。源空上人如何なる思召ふ菴室に閉籠り何方へも出給はざりし

九條関白兼実公覚束なく思召され雑掌藤右衛門尉重經を使して上人の菴室へ遣され此頃は寺絶て法駕幾曲られず尉門は堪ぬ。抑浄土宗の安心起行年来御示を承るとも未心に會得し難し万望浄土門の要文と記し給り此座右に置て常に法顔に向ひ奉り且は後の記念とも為ん。と言遣されれば。源空上人領掌あて安楽坊に筆執せ撰擇集と著述と進せ給ひぬ。兼実公御悦喜浅からず深く上人の法恩を謝し給ひ且は聞ひて愈浄土門をぞ宗ぶひ給ふ。茲に睿山の明雲座主生死の出離の要を疑ひ給ひ如何して出離生死の道を

得度と問まゐらせ給へ。永弁答て云。うの義は源空ゆへ御尋有べしとや
されども無御坊より問れられと御頼有る故。永弁承り相模房と
いへ僧を以て源空上人を坂本へ請招申る。源空上人何事やらん坂本へ
いでゝ申ひるゆへ永弁法印對面して明雲座主の命と告とも如何とて生死
を離彼岸へ到度。御房は兼てうの義を思定給へ由承る願く
は示給へと問れ。上人答ていはく。此身は於ては聊思定事もい但し傳承
いる成佛は難といへども往生安とやら道綽善導二師の教は佛の願力
を縁とまれ。下愚の凡夫も往生とる事を得とぞ。然ども座主及び御房の
如き知識は示給へ義もいまだ自ら思定の事なりとて。何事も曰給はは
帰りなひ。永弁呟て或人は向ひ法然房は博学の人なりと安心の外

偏執深く僧なりと誹謗し給へ。上人つゝしみて我何を偏執をいだき給
彼永弁顕密の学は達し給へども。まだ道綽善導二師の釈義を窺ず
まだ疑心を生し。源空は偏執あると思へり我不知事は心疑の起
るとのたまふ。曰給へ。永弁申さく此仰を傳はさんぬ道綽善導の
釈義を開せんと。百日の間大原の閑室にて。浄土宗の崇とする書物
を残さず閲し。今は浄土門の諸書なり見究さりとて。源空上人の庵へ
使僧を立て浄土教の法文をもあらためん見渡て。就ては不審の条々を尋
ヤさく間此方へ光臨かし給へ。源空上人心得申
いと御返答あり。東大寺の俊乗坊重源は出離の道を會得
せざりとやせし。如此の時出離の要道をも聴聞せんと。永弁法印

と大原ふて向谷すぐに問御房曰ゑ合て出離の道をのゞさまゝと
や遣ゝるふぞ。重源大いふ治び。後弟三十余人を引具て南都と五都
大原へゞ参る。源空上人の上足の弟子百余人を将て大原へいる内に然ふ
後の弟衆の中ふ熊谷入道蓮生大なる鉈を携て相従々れた。上人御覧
じて。其鉈へ何のゝあふ持参する
やと問ゆるふ。蓮生房谷く
今日の問答ふ山法師ぞゝ吾師
ふ無礼を致さゞ。ゝく此鉈ふて
目ふ物ゐさんゝ持ていとゞや
ゝる上人笑給ひ汝ゞ志ハ過

ゝ有れども今日問答ふ永弁を
倩ゐ。山の碩学ぞ源空
ふ難問するゝ我尽く説伏
人皆学ぞ変すゝ安し。衆徒
信と発すゝ無礼を為ゝのハ
有ぞゝず。心を労ぜゞ鉈を捨
て従ひ来れよと曰ゆるゆ。蓮生
心を安ん鉈を藪の辺へ投捨
て御供ゝゝる。其所を熊谷
の鉈捨藪と呼。今ふ古跡を遺

なり。斯て上人大原へいりぬ。後兼房疾より著して迎へすなり。去程に大原の勝林院の丈六堂を同答の場所と定め。春の方に源空上人殺り席に著ぬ。其後に八百余人の侍弟衆後兼房師弟斤漁を呑で涌居たり。右り席に永弁法印著す。後に永弁が法弟及び大原の学僧達山門の大衆大勢亜居る。誠に曠ぶり見えける。時に永弁言を発し我御坊の言に依て道綽善導の述書及び浄土門に宗とする諸書と閲しるすを華厳天台真言禅三論法相等諸宗祖各浄土の章疏を作せり。茲に御房何ぞ是等の師に依ざて唯善導一人の教を用ひるやと問上人答て曰くやさる所の諸師は浄土の章疏を作るとも浄土を以て宗とせず。専聖道を以て宗とす。予諸師の所造の章疏を閲するに未

宗の情に泥むぬ。本願の正意を知らず。念仏を勧むとも或は自性唯心の念仏をすすめ或は観念又は観察の念仏にして皆自力の念仏なり。是を予是を取ざ。善導師は偏に浄土を以て宗とす。聖道を以て宗とす。予是を取て師とすると。永弁又問て曰く浄土門の祖師其数多し。所謂迦才法師。慈愍三蔵等なり。何ぞ是等の諸師を捨らるや。答て曰く右等の諸師浄土を以て宗とせるとは。未だ三昧を発得せれず。善導師は是三昧発得の師なり。故に取て師とせり。又問て曰く懐感禅師は是三昧発得の人なり。何を懐感は依ざるや。答て曰く善導は師なり懐感は弟子なり。然師に依て弟子は不依なり。又問て曰く道綽は善導の師にて浄土門の祖師なり。何ぞ師なる道綽に依ずして弟子の善導に依るや。答て曰く道綽は

善導すの師とろしといへども。いまだ三昧を発得せざれども。故に船の往生の得否を知
らず。弟子なる善導すに尋向て往生の業を證すへし。故に于道綽師に依
ず善導す師に依りと。如此永弁が難ずる裡の向を言下に答へ云ふ響の物に
應ずるが如く。其より緒宗の秘訣を向答ある事一昼一夜に及び。華厳天台真
言法相三論禅等すの宗派の得失凡夫の初心より佛果の極意にいるの迄難問
に應じて具に説示しめたり。右等すの緒宗皆義理深く利益廣大なり。されど機
に應ずる人を成佛得脱何の難れ事かあらん。然ども源空が如き下愚の者は其
器にあらざる也。皆難く遂安し。抑源空初発心の昔より。聖道門の緒宗に渡
普く出離の道を求るに。是も難く彼も難し。是他なるず。世澆季人智下根に
して。當世の凡夫の機に相背が故なり。然を道綽善導すの二師是を善く察し

三部經の旨と云て弥陀の願力を強き縁とし。上智も下愚も如。戒を持も破戒を
持ぬも。更に論じ撰ばず。唯極樂往生の要路は只称念佛の一行なりと。法
藏菩薩の因行の初より弥陀如来の徳果に至るまで。理を究言を尽し説
し置玉へり。但し是自己悟し所を述るにしあらずて。敢て上機の人の解行を
妨げ玉ふにはあらざると。理非明に弁舌滔々として懸河のごとし。一言半句の
淀もなく説きひかれば。さしもの永弁も理に伏して再び言所なかりけり。其余
の学僧數百人の衆徒も共に感じて信伏せざるはなく。姿をあらため源空上
人なりと疑ふらくは是弥陀如来の此所に来迎し玉ふにはあらずと。皆掌を合
し我を忘て異口同音に念佛を称ふる声山谷に響き林野をも動しけり。永作
は頭を席に着身を平伏て源空上人を礼拝し。貧道愚昧の我執に心昏し知

織の法義を妨げすゝ罪深くれ今日師の教化に依て胸中の雲霧晴
新に香を拝するが如くして。真実に皈伏の色面に表れ名れた。上人の歓喜
ひ給ひ。後弟を率て吉水へ帰りぬ。後来房八向後と承まて決定往生
の旨を会得し大に悦ひ是も弟子と将て奈良へ皈り々々其後大原に
八十二人の衆を定め。勝林院に於て不断念佛とゝ更と始行なる事永年
そ其十二人の随一とゝ更えなる

源空上人流罪并帰洛御往生之事

源空上人大原の風を聞に勝れ更都鄙遠國まで其名を隠なし。上人
の法を信仰高くなりて。京の繁昌肩を並る宗門もなくなる。然に後
南都の衆徒山門の大衆是を羨み妬み浄土門に更有りと覬々に源

空上人の末の弟子に法然に更よせ他宗を悪さるに誹謗する僧有名れた
睿山の衆徒大に憤り。浄土宗を停止せんと。元久元年の冬睿山大講堂
の庭に三塔の大衆集會し。専修念佛と差止むべき由衍状を造て座主
大僧正真性に訴へ其騒動大方ならず。然る後源空上人世々のひそ強らせ給
ひ外に衆徒の憤りと宥め。内に徒弟の僧更と縅められんとす。高弟の人八十
余人を擇出され。七ヶ条の誓言と神文に記。右の八十余人を連署せしめ山門
へ送りなひ。又月輪禅興殿よりも山門へ御書を送られ衆徒を宥め給るに
よつて。漸に訴訟の義に止まり。然ども南都興福寺の衆徒の怒いまだ止
まず。日二年九月衆徒集會。衍状を造りて朝廷へ強訴し。法然房ならびに
徒弟推大納言公継入道を罪科に行ひ更又興福寺へ下し給へ

願ゐれば。朝廷より御信仰の上人お
ほ。衆徒を宥めん。僻事八弟子
の科ゆて源空ば罪ゐ。他宗と
雖ー者八寄醫の上ゆて罪科ゐ等
ゐ。とて源空上人へ御咎もなく南
都の強訴ゆいづ〜変ど成ゐ。松
ゐ建永元年十二月九日。先帝後鳥羽院
熊野へ行幸ゆ。御留守
中ゆ京都獅子ば谷ゐ於て。源空上人
の高弟安楽住蓮と云二人の僧別

時念佛ど始六時礼讃の法事を勤る日く糸絹入雲殿のでゝ。殺心入道す
る徒も多ゐる其中ゐ後鳥羽上皇ゐ仕なる宮女ゐ松虫局鈴虫局ゐて二
人の美婦有ゐて世を無情やみ。いえ獅子ば谷へ詣て念佛ゐ心と傾ば安
楽住蓮ゐ戒を授り翠の髪と剃て尼と成ゐ。上皇熊野より還御ゐ
て此義ど聞。二人とも御電愛の局なれば大ゐ逆鱗ゆしく。早速安楽住蓮
を召捕せて御糺明の上。二僧とも六条川原ゐて死刑ゐ行ゆ。逆鱗猶止
まゐず。弟子の罪を師匠ゐ及ん。源空上人ゐ俗称と下れ藤井元彦と号て
土佐國へ流罪ゐ所を。と院命と下されゐ。是を聞て數多の弟子達大ゐ
驚き是ゐ。いとなる院宣ゐやとて皆泣悲ん血の涙ゐ三衣を絞り洛中洛外
の貴賤男女の泣叫声街ゐ充て喧ん斗なり。月輪殿兼実も御入道の後ど

源空上人の弟子となりまゐらむ取合御歎ふく何年上皇を中宿わゝく内く
院参の公卿に御願おゝて歎奏おりられども強く者や好るふすり敢て勅免き
ふりゝ其ども源空上人を更に御歎の色もなく徒弟達に曰ひるハ予年
冬く都に住て普く諸人念佛を勧られて遠國へ赴き田舎の者に念佛
を勧まゐらく思ども期いらずと未素意を果さるる今度流罪
に所せらる支部て年来の宿願を遂る喜わり是全く佛の御ちらひ
にて頗る朝恩と謂べしとて御歓の色在しゝ斯て建永元年三月十音
宦人に守護せられ都に松谷の房を出の八月輪入道殿御余波を惜れ
上人を法性寺の小御堂に三夜留まりるひ終夜語慰めひ土佐國へおすり
遠ゝ流罪の所領の地讃岐へ移しまゐらせんとの内く人を以て院へ歎き奏ゝ

よゝく御氣色ゆるさるるとまれど讃岐へ下るべしと仰ゝ上人其御
しの淺くまるを返く怡謝ひまゐらひ諸夜明ゝられて入道殿に別を告るひ
法性寺を出く怪の張輿ゆりられ用張成河弥との人此世の御余波の御とる
なりとて一番に輿を早る門ゝ御ゆ隨ひまる徒弟飛六十余人なり其外御見
送のため前後左右に從ふ道俗貴賤幾千万とも数をしらず念佛の声と泣悲
む声街に充満に余る涙地を潤せり斯て鳥羽の岸より船に乗て配所へ下るべ
其船路の泊ゝ兵庫明石高砂室津なゝく御船を寄るに付て其所の人民法
門に帰する者数をしらず遂に讃岐國塩飽に着ひ地頭後河権頭高階
保遠入道西忍が館に入せまゐられ西忍重ゝ尊敬し菜湯と殺珍膳を調へて
種くもてなし進せる偖西忍が方と三出の門岡に松の庄生福寺に入まゐ

當國隣國の貴賤男女ともに生福寺へ群参して浄土門に入者昼夜絶間なし
て多し。都にて八月倫入道殿源空上人の御別を深く歎き給ひ年来の御病
重り。三月の末に八十ばかりにと思召藤中納言光親卿に源空上人の流罪勅免
の宣を頼置れし。終に嵯峨元々年四月五日臨終正念にして往生の素懐を遂ぬ
ひたすら壽五十八才にぞおはしける。其後光親卿より上皇ならびに王上門院へ源空
上人の流罪恩免の宣を願れける也。最勝四天王院供奉に付大赦行はるゝに
依て。同年十二月八日源空上人に勅免の宣旨を下されぬ。されども猶洛中の往来は
免されざりけり。上人已に恩免の宣旨を載せられて洛岐を立て摂津をさして
上ぬ。念佛門に帰依せし國中の老若男女皆御名残を惜て袂を絞り
けり。上人も都の往来を免されざるに依て摂州勝尾寺へ入せられけり。當寺善

仲善義の古跡勝如上人往生の地なり。源空上人を西谷に菴を結びて住
ひたまふ。勝尾寺に未だ一切経無りければ上人の御所持の一切経一藏を
寄附しまひけり。斯て勝尾寺に住の事四年に及ぶ。義元四年の夏上
皇石清水八幡宮御社参在しける。八幡宮の梦の御告の更有ける。依て
還御の後藤中納言光親卿に命て源空上人帰洛御免の院宣を
給はりける。是に依て上人勝尾寺を出て帰洛し東山に閑寂
なる地を選て大谷に菴を結て住しぬ。今の知恩院是なり。洛
中洛外の貴賤大に怡び日く糸竹する人殺しに閑静の地も更に
人絶ぬなりけり。は五年建暦と改元あるに。二年正月二日の頃
より上人御老病再発して病臥のひさしく後承達大に驚き良医

小委て茶餅を勧められども墓くしく辞もせざりき。上人往生の期の来る成知召れた唯昼夜念佛し給ひ弟子達へ往生の義を語り折く佛菩薩の来迎し給ふを見るよう仰られ給ひ廿三日辰の刻忽然として上人の御枕頭に一人の上臈現ぜ上人に向ひ御往生も其期近く見えまを知らせて浄土宗の安心起行如何心得いかに願くは御存生の内に一筆の御示を給りたく願ひ奉れば。上人起おわりて若き女性に似気なく殊勝なる御望変ずる其義は先年月輪殿の御所望に依て撰擇集と申書を述作して進せう。彼書に浄土宗の安心起行具に記し置たれば彼書を御らんあれと曰ひ終れば女性は返し。撰擇集の義は少及いへども文義弘くして妄なる愚なる女の容易會得しがたく侍りしに安らかなる仮名文にて女童も續安く會得なり易く書示し賜りたく所望し奉るに上人さらでだに筆紙を惜ひ唯一紙に書しるし給へと書早て与へ女性は押頂て續き給ひ。偖も難有御示しかな此御文にて今迄の迷ひの雲も晴れ五障三従の罪深き妄も極楽往生の便を得たりぬとて感涙を流し御暇申て立去る。此時上人の御病床に侍病の人もなく次房に勢観坊源智唯二人居給ふ。上人の上臈と談話し給ふを聞て暗に障子の透間より窺ひ居給ふ。上人一紙の文を書て与へ給ふを上臈は續て深く感ずる体にて辞を告て立出る。源智紛れ其帰る所を見届んと密に其跡に付て上臈は車に乗賀茂の方へ車を押せる。紙の森の辺にて車を見失ひ其所此所と尋ぬれども更に行方を知ず。余りに

不思議に思ひ、立帰て上人の枕頭へ参り、先剃の女性は何方の御方ぞやと問
ひ給へば、上人の御答へ、彼女性は人間にあらず、神佛の仮に女性の姿と化し、源空
が病苦に逼り、宗門の大事を忘却せんと欲し来りしなりと曰ひ、忽ち源智手を
拍たれば、社頭の辺にて車の跡なくなりぬも理なり、正く賀茂明神にてや在し
ん、其ときもれ彼女性に書て与へし法絡を拙僧にも書て賜りたへ、師の御
紀念とも拝し、且は世人に示の種にもいま一度と願ひ奉るぞ、上人諾ひ、又一紙
を書て源智房に与へらる、今猶黒谷金戒光明寺に随一の宝物と称する上
人御直筆の一枚起請是なり、斯て上人は御病苦の中にても絶ず念佛を唱
ひ給ふ、世間より廿五日に当りて、次第に称名の御声低くなり、終に廿五日
午の刻、慈覚大師の九条の袈裟を掛け、頭北面西にして、光明遍照十方世界

念佛衆生攝取不捨の文を称へ給ふ。称名合掌して眠るが如く大往生をぞ遂げ給ひける。御臨終の奇特種々あれども吏長々これを略す。春秋八十九歩尊き日じ寿を延て。御年支干も同じ壬申の當年も不思議なりけり。三百余人の善男善女の悲歎限なく。彼如来の入滅の五百歳遠の泣悲しも斯やと思ひ知られ侍り。有がたき吏あるねぶ。御遺言を任せ御骸を石の唐櫃に収め大谷の廟堂に建て葬送せすりけり。茲に武藏國の住人に楽原左衛門入道と云人兼て上人と信仰し。御姿を木像に造り。上人に開眼を乞く常に敬ひ尊ミるに上人已に往生のいとまを告て悲哀に堪ず。彼木像を生人の上人と崇朝夕礼拜恭敬しけり。其後臨終のぞ。種々の奇特を表し往生の素懐を遂さ。茲に入道と年頃交り深き尼伴の木像を都大谷へ贈り進せる。此尊像ハ始和泉院に安置せ

せし度々の霊夢あり。後光厳院

応安元年知州當麻住院に移らせ給ふ。上人御往生あり。吏都鄙に伝へ聞て念佛帰依の貴賤老若涕泣の涙に袖を絞ぬはなく。我も〳〵と大谷の廟堂へ参詣する吏引も切ず。称名の声山野に響て哀も殿〳〵なり。其後順徳院の嘉禄三年に山門の衆徒に並榎の堅者定照と云僧浄土宗の盛なると妬み。弾撰擇と号せし書を綴て念佛門を誹謗し。隆寛律師と云人又顕撰擇と云書を作て定照が書を糾す。此吏遂に争論となり。定照山門の大衆をそそのかして大谷の廟堂を壊ん。理不尽に朝廷へ強訴し大谷押寄んとす。其由浄土方へ世吏聞て上人の遺弟達頗る驚き。衆徒の寄来る先にと。密に上人の御遺骸を守護して西山栗生野へ移し。終に火葬にまつり。御白骨ハ嵯峨の二尊院へ納すりける。彼栗生野の茶毘所の跡に堂を建立して常念佛を修し

今の粟生野光明寺是なり。呼尊ゐの源空上人末代衆生のさゝ極楽往生の道を開き易行念佛の法を立一文不知の輩も成佛得脫する事を得せしめ給ふ。されば宗門年くゝに栄名僧代々出て元祖大師法德愈光を增玉へり廣大の慈恩を報じまゐらゝ唯朝夕専修念佛の行を勤るゝ如公首座ゝ子。猶佛檀ゝ向て唱る西向文なりゝ元祖大師御述作の一枚起請の大意ハ次ゝの巻ゝ紀婦女童蒙の心得とな寸者なり

浄土宗西向文和訓圖會巻之上終

大谷文庫

書二十一
三冊